

均が最も重要な概念となり、さまざまな意味における社会階層別の数値の把握は第二義的なねらいとなりがちである。その意味で例えば経済の二重構造の分析を試みる場合など、統計が不備であることは常に経験せざるを得ないところである。しかし、最近ではかなり利用出来る統計も多くなってきているし、制約は多いが、その中でももう少し構造分析の指標をとり入れていただきたかった。

〔中村隆英・石川邦男〕

ニコラス・カルドア

『経済安定と成長に関する論文集』

Nicholas Kaldor, *Essays on Economic Stability and Growth*. Gerald Duckworth & Co. Ltd., London, 1960, pp. 302.

I 理論経済学、特に巨視的経済理論の主要な分野で幾つかの先駆的業績によりその名声を馳せているニコラス・カルドアは、現在、イギリスのケムブリッジ大学で教鞭をとりつつも第1線の仕事をもって学会の先端に立っている経済学者である。この論文集はケインズの『雇用の一般理論』を基礎とした景気変動および経済成長の諸問題を、主として理論的な観点から分析した過去の論文を1巻に収録したものである。

II 全体は3つの部からなる。第1部は『投機・流動性選好および雇用の理論』というタイトルの下で4個の論文から構成され、ケインズ経済学の基礎的諸問題を取扱ったものである。第2部は『経済変動の理論』という表題の下で5個の論文から構成されており、1940年にエコノミック・ジャーナルに発表された有名な論文「景気循環の1つのモデル」を収録している。これに対して第3部の『経済成長の理論』は、1953年以降の経済成長に関して書かれた4個の論文を集めたものであって、特に最後の論文「経済成長の1つのモデル」(エコノミック・ジャーナル、1957年)はカルドアの最も新しい巨視的経済動態論の1体系を示すものとして注目に値しよう。

III この論文集の序言において、カルドアは次のように述べている。「ケインズ自身の短期均衡のモデルは、主として何故に尨大な失業が継続し、また何故に伝統的な貨幣・銀行政策がこれを阻止するのに無力であるかを説明することに関心をもっていった。だが間もなく彼の思考装置は景気循環の現象に適用され、資本主義システムの不安定性の原因および形態を分析するのに用いられた。そして更にこれは、経済成長の問題への移行——主として純粋に理論的な側面から1つの景気循環の充分なモデ

ルを作りあげようとした努力の副産物——に導いた。というのは、ケインズの理論が短期静態均衡であったのと同じように、ケインズの理論に基礎をおいた景気循環のモデルは、上昇しつつある長期のトレンドを背景としもしくはその副産物としてではなく定常均衡の位置を中心とした変動を説明することに成功したにすぎなかったという意味において、静態的であった。景気循環のモデルの中にトレンドを導入しようとした時に、少くとも私の場合には、全問題を根本的に再検討するという思いもかけなかった困難が生じてきた。勿論、成長理論への興味移行は、第2次大戦後の15年間に経済成長は景気循環よりも遙かに目立った資本主義経済の特色となったという事実を反映している。いずれにしても成長問題への関心は経済理論の全構造の再検討——「ケインズ革命」がふれずに残しておいた分野への拡張——および定常的ならざる状態の新しい経済学へ導いた。これは静態理論の拡張ではなくてそれに代るものであり、またそれはなお定式化のプロセスにあるものである」。

IV 以上のカルドアの序言から容易に知られるように、景気循環および経済成長に関する後の理論は、ケインズ経済学の拡大という形で進められているのである。その最初の試みは第5論文「安定性と完全雇用」(エコノミック・ジャーナル、1938年)である。この論文は高度の投資活動をして早晩に不安定ならしめる諸要因を剔抉することを目的としたものであるが、この中で彼は、貯蓄函数は利潤と賃金との分配関係からは独立ではないこと、完全雇用が到達すると投資はそれに等しい貯蓄をファイナンスするように利潤分配を調整すること、投資活動を支配する要因として技術進歩率に重点をおくべきことを強調している。この中で、所得分配率は投資がそれに等しい貯蓄を生みだすように決定されるという所得分配の投資=貯蓄の決定理論、および技術進歩を考慮した投資理論は、彼の現在の成長理論の2つの主要な柱となっているのである。

ではカルドアの景気循環論および経済成長論が「ケインジアン」とよばれる最大のメルクマールは何であろうか。それは結局において投資はそれに等しい貯蓄をもたらすように経済活動を決定する、ということにつきるであろう。1940年の「景気循環の1つのモデル」において、彼は非線型の投資および貯蓄函数を用いてケインズ理論を「局限循環」limit cycleの理論に作りあげた。非線型の投資函数の設定にあたり、カルドアは加速度原理を排除し、そしてその立場は現在でも踏襲されている(これがヒックスの景気循環論に対する彼の1つの批判

点である)。この論文は、第2次大戦後の景気循環論における1つの中心的論文として注目されたが、しかしこの論文では所得分配・技術進歩・人口変動というすぐれて動的な諸要因には適切な考慮が払はれていない。

V 成長と循環を統合した理論への最初の試みは、1954年のエコノミック・ジャーナルの「経済成長と循環的変動の関係」という論文である。この論文でカルドアは一方ではカレッキー・ヒックス・グッドウィンの景気変動論は a trend-less economy の循環論であるとしてこれを片付け、他方でドマー・ハロッドの動態論を a cycle-less economy の成長論としてこれを批判する。多分、ハロッドの理論を景気循環のない成長論であるときめつけることには異論があるかも知れない。しかしカルドアによれば、ハロッドのいうようにその体系が景気循環を説明し得るのは均衡成長の径路が不安定なる場合であるが、ハロッドの説明が正しいとすれば同じように発展のない静態均衡の状態も不安定でなければならないのである。従って、景気循環は経済成長もしくは経済発展の必然的な随伴現象ではないということになる。

カルドアはこの論文で経済の発展と循環とを同時に説明する基本的要因を、企業者の利潤動機に根差した期待の強度に求めている。これは曾ってケインズが animal spirits とよんだもの、もしくはシュムペーターが革新的企業者精神として規定したものに等しいといつてよい。しかしシュムペーターの経済発展論についていえば、その困難性は「それが分析的であるよりは叙述的である」(pp. 213—214)ということにある。そして1957年の「経済成長の1つのモデル」は1つの完結した循環を含む成長理論の体系へのカルドアの最初の試みである。

この論文は3つの点において、これまでとは異った見解を含んでいる。第1は成長理論の分析にとっては完全雇用の前提が設定せらるべき(should be)こと、第2は利潤分配率は完全雇用の近傍では成長を決定するのと同じの要因、すなわち投資によって決定されるということ、第3に技術進歩と資本蓄積とを区別することは、不可能であること、これである。この最後の点を彼は「技術進歩函数」という武器(これは従来の生産函数に技術進歩の要因を導入したものである)によって示そうとした。労働生産性の成長率を $g(y)$ 、労働の資本装備率の成長を $g(k)$ で示すと、カルドアの技術進歩函数は簡単に $g(y) = \alpha + \beta g(k)$ で示すことができる。 $\alpha > 0$, $1 > \beta > 0$ である。しかし実を言えば、この函数は決してカルドアのいうように「資本の成長と生産性の成長との間の単一の関係」(p. 265)を示すものではない。なぜならばこ

で $\alpha > 0$ ということ自体が、 $g(k) = 0$ なる時でも労働生産性が α の率をもって増加することを示しているからである。しかしこの点はともかくとして、所得分配率の理論についてはどうであろうか。

結論的にいってわたくしは、カルドアがみずから「ケインズの分配論」と名付ける試みは決して成功していないと思う。勿論投資が貯蓄に先行し、そして投資に等しい貯蓄が得られる所まで国民生産物が拡張するという論理は十分に理解できる。しかし、企業者の決定できるものは投資の大きさそのものであって、国民生産物に対する投資の占める比率ではない。しかるにカルドアの所得分配論が意味をもち得るのは、投資の国民生産物に占める比率が知られた時においてであって、従って彼の理論はいまだ説得的ではないのである。

紙数の制限は、わたくしをしてこれ以上カルドアの経済成長論に立入ることを不可能にしている。しかしすでに他の機会において¹⁾、わたくしはカルドアの理論にふれたことがあり、且つ技術進歩を含んだ生産函数をよりどころとして経済成長の理論を分析したので、ここでは割愛しよう。また、カルドア自身も、その序言の中で、この最後の論文の内容は現在(1960年1月)では若干の修正をうけていることを明かにしている。われわれは期してその新しい展開を待つべきであろう。

VI この論文集は、同時に公刊された『価値および分配に関する論文集』および公刊を予定されている『経済政策に関する論文集』と共に3部作の中の1巻をなすものである。ここに収められた論文はいずれも曾って学会の注目をひきそして現在でも学会の中心的役割を演じているものであって、巨視的分析の立場から雇用・利潤・資本蓄積・経済の成長と循環の問題を分析しようとする者にとっては逸することのできない著書であるといつてよいだろう。この論文集を通読してわたくしは、カルドアのたゆみのない経済学への情熱と前進に強く心を打たれるのである。 [荒 憲治郎]

1) 『経済学研究』(5)における拙稿「技術進歩の経済分析」(pp. 155—266)を参照せよ。

P・スラッファ

『商品による商品の生産』

Piero Sraffa, *Production of Commodities by means of Commodities, Prelude to a Critique of Economic Theory*. Cambridge University Press, Cambridge, 1960, pp. vii, 99.